

便の利用客数に影響が出ることは当初から予想されていたことであるが、10月17日に韓国の聯合ニュースが報道した記事によってその大きさが明らかになった。

その記事は、韓国空港公社が国会建設交通委員会の委員に提出した国政監査資料の内容を紹介したものである。それによると、KTX 開通後の4月から7月までの4ヶ月間で、ソウルの金浦空港発釜山、大邱、光州行き航空旅客数は昨年同期に比べて24%減の282万3838人で、運行便数も20%減の2万1503便であった。済州路線のようなKTXの影響を受けない路線では旅客数の増加が見られるので、国内線全体では旅客数が1270万7364人で、昨年同期に比べて11%の減少であるとのことである。ちなみに、地方空港の国際線の場合、1998年以降昨年までの5年間で、輸送実績が年平均12.3%増加するなど持続的な成長を見せ、今年は今末までに37路線で260万人の乗客が利用すると推定されている。また韓国空港公社は、金海（釜山）と済州、光州を除いた金浦など11空港が赤字になると予想しているとのことである。

ところで、KTXのホームページ (<http://ktx.korail.go.kr/>) によると、1996年から次世代高速電車G7が開発されている。これは現在のKTXよりも50km速い時速350kmの最高速度をもつもので、試験運行と安定化の期間を経て2007年から京釜線と湖南線に投入する予定であるとのことである。このG7は「韓国型」と形容されており、フランスの高速電車TGV (Train de Grande Vitesseの略)を導入したKTXとは異なり、韓国が独自に開発したものと思われる。ともかく、このG7が投入されれば、韓国の国内航空便はますます打撃を受けることになるであろう。

(田川光照)

編集後記

「語研ニュース」第12号をお届けします。今回は、取り上げられている国・地域が中国、韓国、サイパン、メキシコ、スペイン、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスと徐々に広範囲なものになりました。その内容も旅行記から時事的なものまで多彩で、楽しく読めるものになったと思います。

ところで、名古屋語学教育研究室が行っている学生向け事業として、この「語研ニュース」発行のほかに、外国語検定奨励金制度の実施や外国語コンテストの開催などがあります。これらについて詳しくは当研究室のホームページをご覧ください。(M.T.)